

ちょうせんぶなと美しい小箱

小川未明

青空文庫

正 吉くんは、はじめて小田くんの家へあそびにいつて、ちようせんぶなを見せてもらったので、たいそうめずらしく思いました。

「君、この魚はどこに売っていたの？」

「このあいだ、おじいさんが売りにきたのを買ったのだよ。」と、小田くんはいいました。「こんどきたら、ぼくも買おうかな。」と、正 吉くんは、あかずに、ちようせんぶなのダンスをするのをながめていました。

「それよか君、あしたいっしょに魚つりにいこうね。」と、小田くんはいいました。

「ぼく待つているから、君、さそつてくれたまえ。」

「ああ、お昼すぎになつたら、じきにいくからね。」

二人は、こうおやくそくをして、正 吉くんはやがてお家へかえつていききました。途中に大きなかしの木がありました。その下で、金魚売りのおじいさんが休んでいました。

「あのおじいさんではないかしら。」と、正 吉くんは思いました。
ちかづいて、たずねました。

「おじいさん、ちょうせんぶなあるの？」

たばこを吸^すつていたおじいさんはにこにこしながら、

「ええ、ありますよ。」と、答^{こた}えました。

「いくらですか？」

「三匹^{びき}十銭^{せん}におまけしておきますよ。」と、おじいさんはいいました。

それを聞^きくと、正^{しょう}吉^{きち}くんは、お家^{うち}へ走^{はし}つてかえつてきました。

「お母^{かあ}さん、ちょうせんぶなを買^かうのだからお金^{かね}をちょうだい。」と、ねだりました。

「ちょうせんぶなんてあるのですかね。」と、お母^{かあ}さんはおっしゃいました。

「とてもおもしろいですよ。ちようどあたりまえのふなみたいなかたちで、水^{みず}の中^{なか}を上^{うへ}へ

のぼったり、下^{した}へおりたりして、かわいらしいのだから。」と、小田^{おだ}くんのところ

で見てきたちようせんぶなの説^{せつ}明^{めい}をいたしました。

そこへ、姉^{ねえ}さんのとき^こ子^こさんが出^でてきて、この話^{はなし}をききました。

「私も知^しっているわ。正^{しょう}ちゃんは、ちようせんぶなを買^かつてきてどこへ入^いれるつもり？」

と、とき^こ子^こさんはききました。

「うちの水^{すい}盤^{ばん}の中^{なか}へ入^いれるよ。入^いれてもいいだろう？」と、正^{しょう}吉^{きち}くんは姉^{ねえ}さんの顔^{かお}

を見ました。

なぜなら、水盤は自分ひとりのもではなくて、きょうだいたちみんなのものであったからです。

「いけないわ。ちようせんぶなんか入れては金魚をみんな食ってしまうじゃないの。」
と、とき子さんは反対しました。

「金魚なんか食べるものか。」

「正ちゃんはまだ知らないのよ。太田さんのお家にもちようせんぶながいたけれど、おなががすくと、共食いははじめて、強いちようせんぶなが、ほかの弱いのをみんな食べてしまったというのよ。」

「そして、どうしたの？」

「その強いのが、いつのまにかどこかへいつてしまつて、いなくなったというのよ。」

「ねこに食われたんだね。」

「羽があるからとんでいったんだつて、太田さんがいつていたわ。」

こんな話をきくと、正吉くんは、なんだか自分にもいやな魚のように思えたけれど、またそれだけかつてみたいという気もおこりました。

「ぼく、水盤すいばんに入れなければいいだろう。ほかの入れものに入れておけばいい？」

「だって、そんないやな魚さかななんか、私わたし、かうのはきらいだわ。」と、とき子こねえ姉さんは、正し吉よしきちくんのいうことに賛さんせい成せいしませんでした。

これをお聞ききになつたお母かあさんは、

「おなかまを食たべてしまうようなお魚さかななんか、よしたほうがいいでしょう。」とおつしやいました。

正しようち吉きちくんは金魚きんぎよう売りのおじいさんが、自分じぶんがひつかえしてくるかと思おもつて、ゆるりゆるり歩あるいているすがたを思おもいうかべると、早はやくいつてやりたいので、だだをこねまし
た。

「正しようちちゃん、そのかわり姉ねえさんのだいじな、きりの小こばこをあげるわ。」と、とき子こさんがいいました。

「え、あの小こばこをくれるの？」

正しようち吉きちくんが目めをまるくしたのも道理どおりです。とき子こねえ姉さんの持もっている美うつくしいきりの小こばこが、前まえから正しようち吉きちくんはほしくてならなかったのです。それで、これまでたびたびほしいといつたのですけれど、姉ねえさんはくれなかつたのです。

「ほんとうに、くれるの?」と、正吉しょうきちくんは、念ねんをおしました。

「ええ、いやなちようせんぶななんかかわなければね……。」と、とき子かねえ姉さんはいったのであります。

「ぼく、小ばここをくれれば、ちようせんぶななんか買かわないよ。」と、正吉しょうきちくんはやくそくをしました。

「正ちゃんしょうは小ばここをなににするつもり?」

「ぼくのいちばんいいものを入いれるんだよ。」

「正ちゃんしょうのいいものって、なあに?」

とき子こさんは自分じぶんのおへやから、だいにしていた美うつくしい小ばここを持ってきて正吉しょうきちくんにくれました。

ところが、正吉しょうきちくんのるときでありました。お母かあさんが、

「なんだろうね、この茶ちやだんすのあたりで、ガサガサいうのは?」と、おっしゃいました。とき子こさんがわらいながら、

「昼間ひるまからねずみは出でませんから、なんでもないでしょう。」と、いいました。

「いいえ、さつきからガサガサといっていますよ。」

そうお母さんかあにいわれてみると、とき子さんこも、さすがにうすきみ悪わるくなりましたが、なんでもないので思おもって茶ちやだんすの上うえを見みたり、戸とをあけて中なかを見みたりしました。茶ちやだんすの上うえには、自分じぶんがきのう弟おとうとにくれてやった美うつくしい小こばこがありました。

「ねえ、お母さんかあ、正しようちゃんちやうが、なんかこの中なかに入いれたのではないでしょうか？」

「さあ、あの子このことだからわかりませんよ。」

とき子さんこは小こばこを取とってふたをあけて見みますと、中なかからまっ黒くろな虫むしがでできました。

「かわいそうに、かぶとむしがはいっていますのよ。」

「まあ、そうなの！」

その中なかには白しろぎとうが入いれてありました。

ちやうど、そこへ正しよう吉きちくんちがかえつてきて、お姉ねえさんちにしかられると、

「だって、かぶとむしは、くらい地面じめんの穴あなの中なかにはいつているだろう。」と、答こたえました。

「じゃ、このはこは、かぶとむしのお家うちのつもり？」

「ぼく、かぶとむしが大だいすきだから、美うつくしい御ご殿てんにしてやったのだよ。」

「はこの中なかでは、息いきがでできないでしょう。かぶとむしには、このはこが御ご殿てんではなくて、牢ろう屋やなのよ。さつきから苦くるしそうにもががいていたわ。」と、お姉ねえさんちがいいました。

「もがいていた？」と、正吉しょうきちくんは目をみはりました。
そして、正吉しょうきちくんは、かぶとむしをにがしてやろうと、森もりの中なかへいきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「ちようせんぶなと美《うつく》しい小箱《ごぼご》」となっていて
す。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ちょうせんぶなと美しい小箱

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>